

とら た

とらた ふねむし虎太

加藤輝治 作 中山正美 絵



よわむし虎太

昭和53年6月24日

第1刷

著者 加藤輝治

発行者 江口克彦

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 075(681)4431<代表>

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

©1978 Teruji Kato. Printed in Japan

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。

(定価はカバーに表示してあります)

とらた
とわむし虎太

加藤輝治 作 中山正美 絵



日本財団支援

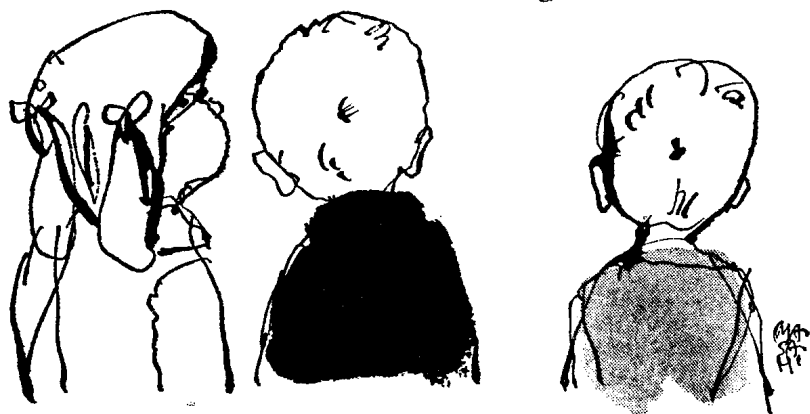
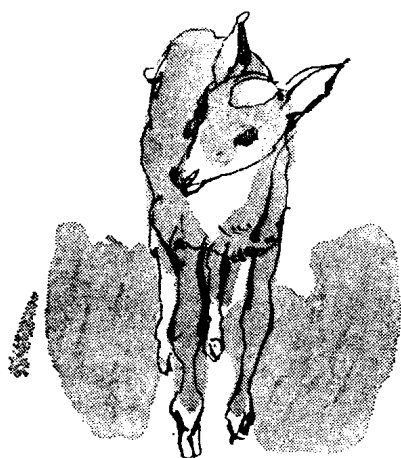
笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

装幀デザイン
上田晃郷

むし虎太

もくじ



よわむしのトラ

美恵先生

「人間も動物です」

学級会

シカと美恵先生

とうさんの失業

ギヤングジカ

すりへるひづめ

はみだしっ子シロ

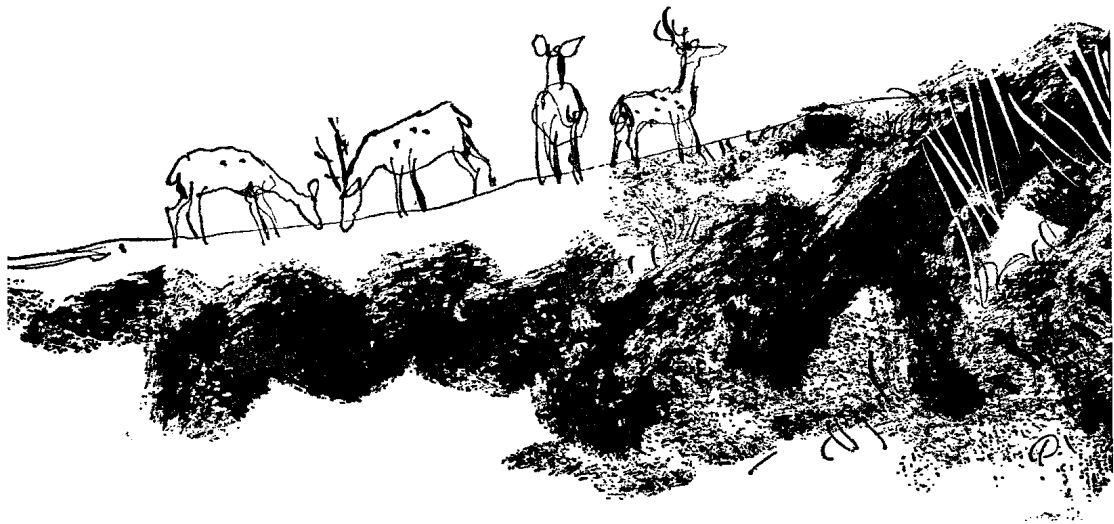
野犬やけんがおそう

109 95 84 67 61 47 38 25 18 8



シロがおぼれる
密^{みつ} 獵^{りやう}
虎^{とら}太^たがとんだ

150 138 122



著者・加藤輝治(かとう・てるじ)

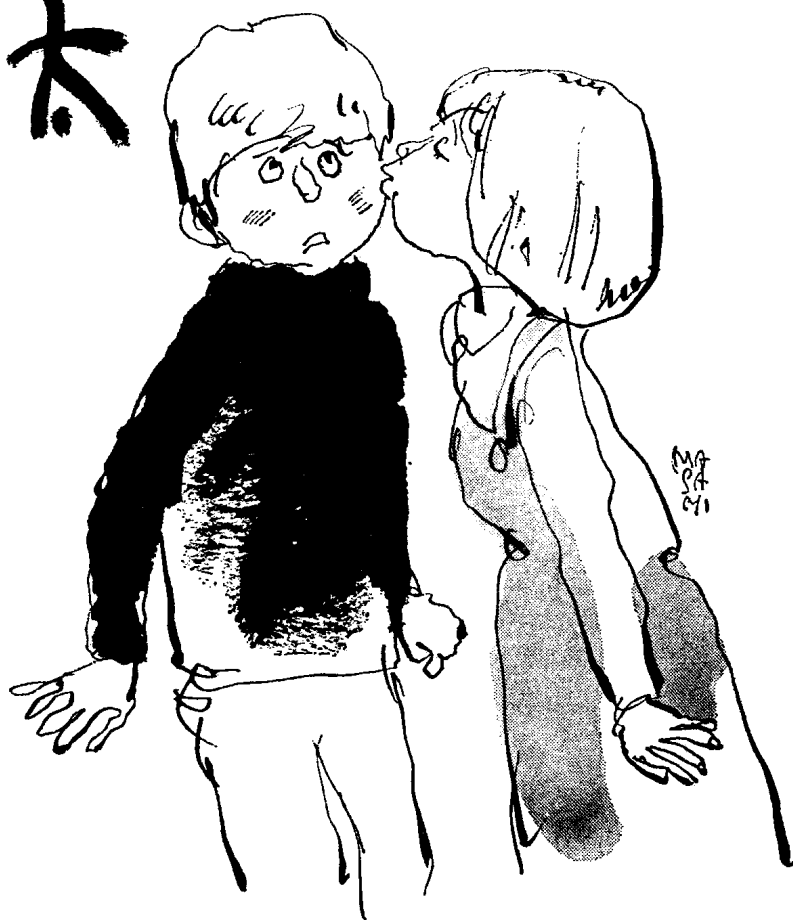
1934年、奈良県生まれ。66年、毎日中学生新聞小説に入選。おもな作品に「ふりかえるな裕次」「ロコがよぶ」(金の星社)「教室で見つけた」などがある。

現住所 〒639-11 大和郡山市北茶町 5

画家・中山正美(なかやま・まさみ)

1914年、宮崎県生まれ。川端画学校で絵を学ぶ。児童出版美術家連盟会員。少年文芸作家クラブ会員。作品は「大きい1年生と小さな2年生」「こんや円盤がやってくる」「わたし妹四年生」など多数ある。現住所 〒152 東京都目黒区目黒本町 6-2-1

よむし 虎太





よわむしのトラ

はじめて、ふたりのあいだに生まれてきた男の子に、とうさんとかあさんは、
考えぬいて、虎太と名づけた。

（なにをするにも、健康が、だから。心と体の強い子に育ってほしい。）
そんな願いをこめて、いかにも強そうな名まえをつけた。

その名のとおり、虎太が強い男の子に育っていたら、ふたりのよろこびはどれ
ほどの大きさだったことだろう。

けれど、『名は体をあらわす』ということばもあるのに、とうさん、かあさん

の願いはかなえられなかった。

トラどころではなく、ネコさえにあわない氣弱^{きよわ}なわが子に、ふたりは心をいためた。

虎太は、夜、便所に行きたくなると、きまって、かあさんをおこしてしまふ。

「また、ねるまえに、水をのんだのやろ。」

かあさんは、口ぐせになったことをいいながら、えんがわに出ると、ぶるっと一ど身ぶるいしてから、虎太の手をとってひっぱる。

（ああ、もうじき十歳^{さい}にもなる男の子だというのに、この子は——。）

ほんとうに、虎太の身のまわりには、こわいことがいっぱい、まぢうけているようだった。

夜中、季節の風がガラス戸をガタピシならしはじめると、もうねむれない。なん人も鬼^{おに}がガラス一まいのむこうから、「あけろ、あけろ、ここをあけろ。」とどなっているように聞こえる。

虎太は、となりの、かあさんのふとんにそっともぐりこんで、齒をガチガチならす。

鬼^{おに}たちがあきらめて行ってしまふまで、かあさんのかたにくつついているが、たいてい、かあさんのぬくもりで、うとうとしはじめ、それからさきはわからなくなってしまう。

（この世でいちばん安心できるのは、かあさんのかた。）

虎太は、心にきめてそう思っているが、これはぜったい、友だちには聞かせられないひみつだった。

「あまえんぼうトラタン。」と、いいはやすにちがいないからだ。いや、もうとつくに、みなは知っているのかもしれない。

カミナリも、こわい。

夕^{ゆう}立ちが近づき、遠くでカミナリのおどりのひびきがしはじめる。するともう、虎太のむねは、ドッキ、ドッキとなって、カミナリのたいこなのか、虎太のむねのたいこなのか、わからなくなってしまう。

「けっこうなこと、夕立ちがきてくれはる。今晚^{こんばん}はずすしくなるよ。」

平気でそんなことをいって、せんとく物を取りいれているかあさんを、虎太は、けんめいによびかえそうとする。

「かあさん、はようはいり、家にはいりっ！」

だいじなかあさんをカミナリがうったりなどしたら……そう思うだけで、虎太の声はかすれてくる。

「あきれるよ、この子は。もうじき、高学年のなかまいりせにゃならんというのに。」

かあさんはわらいながら、それでも仏壇^{だん}の間^まで、せんたく物をたたみですが、しばらくすると、ほっとふかいたため息をもらす。

夏でもひんやりすずしい仏壇の間は、家じゅうでカミナリにはいちばん安全なところだと、虎太は信じていた。むかし



のたてかただから、上にはひろいつし、（屋根うらの部屋）があつて、古いタンスや長持ながもちをおいてある。

だから、どんなきついカミナリだって、下の仏壇ぶつだんの間までおちてくる心配はない。

そう思っているのに、ピカッと青白い光がはしり、トタンに砂すなをぶつつけたようなひどい音が耳をつんざくと、虎太の体は、あつというまに、かあさんのふところにとびこんでいる。

この世界に、なぜこんなこわいものがあるのだろう。こんなきついものをつくった神さまを、虎太はシンからうらんだ。

強い雨がこわい、犬がこわい、注射ちゅうしやがこわい、学校のいじめっ子がこわい、体育の時間がこわい、プール水泳がこわい、風をきつてとんでくる自動車がこわい。まるで虎太は、この世のおそろしごとをひとりでひきうけているようだ。

とりわけ、虎太をふるえあがらせたのは、十なん年ぶりかでおそってきた、ことしの冬の大寒波だいかんばだった。マイナス四十八度というシベリア大寒気団だいかんきだんが、どっかと虎太の町の上空にも、こしをおろしてしまった。

家の中の水道さえこおり、駅にとまっている貨車の上の雪は、いく日もそのままという、いてつく寒さがつづいた。

虎太は、なんまいもかさね着^ぎして、だるまのようにまんまるくなった。

顔にあたる風は、カミソリできられるようにいたくて、くちびるはがさがさにかわき、血さえにじんだ。

かあさんも、学校のことだけはきびしくて、休めとはいってくれない。だれもないところでは、声をころしてなきながら歩き、校門にいくと、手ぶくろでなみだをぬぐった。

「よわむしトラタン、おはよう。」

「きょうはさむがりトラタンやね。」

運動場では、生まれてはじめて見るぶあつい氷をふりかざしたり、手足をずくずくにして雪だるまをつくる友だちが声をかける。

そんな声をうしろにして、虎太はやっと校舎^{こうしゃ}にたどりつくつと、人かげのない階^{かい}段をのぼりながら、ぶるるっと体をふるわせた。

今しがた見たばかりの、友だちの、氷をつかんだまっかな手や、北風にさかま



くかみの毛などが、よけいに虎太をまんまるく、こごめさせる。

この日は、午後までつめたい風が町中をふきあれた。

べそをかきながら家にかえりついた虎太を、かあさんはめずらしく、きつとなつてむかえた。

「こんなくらしいの寒さにまいていたら、とっても一人前の男の人になれへん。大きかったら、およめさんももらわにゃならないし、子どもも育てるんよ。」

虎太、そんなパパになれるの！」

また、くちやくちやの顔になってしまった虎太に、かあさんはこんどは、ちょっと声をやわらげた。

「かあさんの子どものころはね、こんな寒さどころじゃなかったよ。」

矢田^{やた}の里の家に、ほら、竹やぶがあるでしょが。まい朝、雪のおもみで竹が、ボーン、ボーンとおれるの。その音で、かあさんたちは目がさめたんよ。」

「へえ、そんなに雪が……かあさん。」

「うん、むかしはまい年のことだったのに。地球がつめたくなっていくって、いたい、ほんとの話なんかねえ——。」